

「宇宙米」作り始動

玖珠町

ブランド化へ農家などと初会議



衛星データを活用した宇宙米作りについて話し合う出席者＝11日、玖珠町役場

【玖珠】玖珠町は11日、人工衛星を活用した「宇宙米」作りのキックオフ会議を開いた。衛星で集めた生育状況や農地の肥沃度などのデータを基に適切な管理をして、品質アップにつなげる。来年から試験的な栽培を始める。話題になるような情報発信にも努め、3年以内のブランド確立を目指す。

大分空港（国東市）は小型人工衛星の打ち上げ拠点「宇宙港」としての運用が始まる予定。さまざまな波及効果が県内で期待される中、町は9月、新たな宇宙ビジネスを創出する庁内プロジェクトチーム「アポロ」と「ビッグバン」を立ち上げた。それぞれ宇宙米作り、宇宙食の開発を目指している。

この日の会議は役場であり、試験に協力する地元農家2戸、アポロ、関係機関の約20人が出席。宿利政和町長が「玖珠米をワンランクアップしてブランド化していく。所得向上や後継者問題解決のため、衛星データを活用するコマ作りを町内の農家に広めていきたい」とあいさつした。

来年の試験栽培は計6・5畝で取り組む。品種は現在も玖珠米として作っている。

衛星活用、品質アップへ

るひとめぼれ、ヒノヒカリを使用。衛星が稲のタンパク質含有量や色づき、土壌の肥沃度などを観測し、そのデータを日々の手入れや収穫時期の見極めに生かす。

田植えに向けて、町の担当者が衛星データを使ったコマ作りができるシステムの準備作業など、今後のスケジュールを説明した。

宇宙米をPRしていくため、出席者からは「どうやってメディア戦略を展開していくのか」「パッケージにも工夫が必要になる」といった質問や意見が出た。

協力農家の日隈孝海さん（75）町内山田は「大きなメリットがあると期待が高まった。しっかり成果を出したい」。町みらい創生課の横山芳嗣課長は「外部の方とは初めての顔合わせで、共通認識ができた。スピード感を持って取り組んでいく」と話した。

（姫野直也）

